

パイディア

——ギリシア文化を彩る理想の数々——

G・ハイエツト
村島義彦 訳

この本の主題である「パイディア」は、単なる象徴的な名称などではなく、そこに叙述された歴史的事柄を言い表わすに足る、唯一の正確な呼称でもあるのだが、さて、これを定義するとなると、まことに難しい。というほかはない。これとは別のやはり幅広い複合観念——たとえば「哲学」や「文化」など——と同じく、これ自体も、とうてい一つの抽象的な様式などに収め切れないからで、その中身と意味を十分に理解しようとするれば、どうしても、その歴史に目を通し、その試みの数々を追跡しないわけにはいかない。ギリシアの事柄には、ここではあえてギリシア語を用いたけれども、そうすると、当時のギリシア人がその事柄を扱っているかのような雰囲気をしかるべく醸し出せたからである。そもそもパイディアを、現代的な表現に置き換えようとするれば、どうしても「文明」とか「文化」とか「伝統」とか「文学」とか、さらには「教育」などの言葉を用いざるを得ないだろうが、それらのどれ一つとして、ギリシア人が、パイディアという言葉で意味した中身を本当には覆っていない。それらの各々は、単にパイディアの一局面を代表しているのみで、ゆえに、すべからず合体させてはじめて、この観念と同じ領域をカバーできたからである。ちなみに、学問とか学問的活動にしても、底の底で

は、今日の発展の結果として強調される「多様性」によりは、むしろ、こうした局面のすべてが本来は一体であること——ここでのギリシア語における「一体性」——にそもそもその足場を置いていたのだけでも。古えの人たちは、教育とか文化が、固められた技術や抽象的な理論などではなく、国民の知的生活を客体化した歴史的所産からとうてい切り離せないのを十分に納得していた。かれらは、文学こそ、そうした所産の具体化にほかならないと考えた。文学には、あまねく高次の文化がリアルに表出されていたからである。プリニコスによる「教養人」の次の定義は、このような考えに立って解釈されてしかるべきだろう。いわく「ロゴスを愛し、パイディアに真剣である人物、かれこそは、ピロロゴスと呼ばれるに値する（ピロロゴス・ホ・ピローン・ロゴス・カイ・スプウダノーン・ペリ・パイディアーン）」と。

序文

皆さまには、これまでに扱われた験しのない主題を、あくまでも歴史的に探求した一つの作品をご披露しよう。そこで取り上げられているの

は「バイデリア」という、ギリシア的な人格の形成そのものであって、これは、ヘレニズム（ギリシア主義）を全体として捉える新たな研究の確かな基礎となるにちがいない。ギリシア人の国家、社会、文学、宗教、および哲学等々の発展については、これまで、多くの学者たちが精力的に論述してきたけれども、ギリシア人の人格がどうした歴史過程を辿って形造られてきたのかと、そうした人格が、自らの掲げる人間性の理想をどうした知的過程を辿って形造ってきたのかの、そもその相互作用を十分に説明する点になると、誰ひとり、いまだに手を染めてこなかったように思われる。この主題にあえてわたしが取り組んだのは、しかしながら、いまだに取り組まれた事例がないのをたまたま観察したからではなく、この重要な歴史的かつ知的な問題を解き明かせば、ギリシアが、その後のあまねく時代に及ぼした不滅の影響の元ともいえるべき、比較を絶したその教育的天分をいっそう深く理解できるだろう、と固く信じたからにはかならない。

この本の第一巻では、英雄型の人格と、市民——ないしポリス——型の人格が座を占める時代、すなわち、アルカイック期と古典期におけるギリシア文化の創建、その成長、その危機について論述されていて、それは、アテナイ帝国の崩壊で幕を閉じるだろう。続く第二巻には、プラトンの時代における知性の復興、その知性が、既存の文化や国家に打ち勝とうと懸命に繰り広げた闘い、そして、ギリシア文明が世界規模の帝国に向けて変容していく様子などが書き留められるだろう。ローマと初期キリスト教が、ギリシアに始まる文化の過程にどのように巻き込まれていったかについては、ここでは触れずに、もつと後で提示したい。

この本が対象にしているのは、単に学者ばかりでなく、われわれの千年文明を維持しようと懸命に格闘する目下の状況で、ギリシアに接近する道を再び見い出そうと求めるすべての人たちである。そうは言っても、でき

るだけ幅広く研究したいという切なる願いと、この本の各箇所が登場する複雑な資料を、それにふさわしい深さと厳密さで緊急に扱い直さなくてはならないという切なる想いは、なるだけ折り合わせなくてはならず、この作業は、時として大きな困難をともしなかつた。けれども、こうした観点に立って古代世界を研究したおかげで、わたしは、ここ十年にわたって自らの教育と研究の主たる関心の的であった、いくつかの新しい問題に改めて注意を喚起された。そうした成果の数々は、しかしながら、補遺の形で公にはしなかつた。全体の累積効果を壊したくなかつたのと、本そのものを、不釣り合いなまでに膨らませたくなかつたからである。わたしの披露した見解は、主として、この本自体が裏付けてくれた。ここでは、典拠とされたテキストの解釈から常に出発し、諸々の事実は、そうした事実の口から直接に説明させるように配置されていたからである。脚注で触れられているのは、ギリシア人の著者から引用した原文と、わけても重要な現代の著作——とりわけ文化史の問題と直接に関係した——である。くわしい解説が必要な箇所でも、ほとんど註という形は用いないで、そうした部分の仕事のいくばくかは、別の研究論文として改めて公にされた——これらについては、脚注でも簡単に引用しておいた——。その他の仕事についても、のちに公にしようと考えている。わたしの本自体と研究論文は、まさに一つのまとまりとして、絶えず互いに補い合い、説明し合っているのである。

序論では、ギリシアのバイデリアが、歴史の中でどうした位置を占めているかを、より一般的な観点から描き出そうと試みた。これに加えて、ギリシア的な文化教育をわれわれ自身がどう理解するかに応じて、われわれに先立つ時代のヒューマニズムとわれわれの関係がどのように影響されるかについても、やはり簡単に指摘しておいた。この問題は、今日、かつて以上に激しく論争されているが、ここでの歴史的な探求ではどう

てい解かれるべくもない。それは、ギリシア人によりはわれわれ自身に深く関わっていたからである。とはいえ、意味のある教育意図や知識を手に入れようとすれば、今日でも、ギリシア文化への完全かつ根本的な理解をとって外すわけにはいかない。わたしは、このような確信に促されて、この問題に学問的な関心をそそられ、この関心を介して、つまりはこの本をまとめたのであった。

一九三三年一〇月

序論

——教育の歴史に占めるギリシア人の位置——

一定の発達段階に達した国家はすべて、本能的に、教育活動に向かわざるを得なくなる。教育こそは、社会共同体が、自らの物質的な性格と精神的なそれを維持し、かつ伝え残すプロセスにほかならない。たとえ個人は消え去っても、これを介して、そもそもその型は存続したからである。動物や人間の身体的特性なら、世代から世代へと受け継がれる自然のプロセスによって（『生殖行為』）その永続も保証されるが、人間における社会的で知的な本性となると、そうもいかず、むしろ、そうした本性の生み出しに与った能力——理性と自覚的意志——を磨き上げる中で（『教育行為』）、はじめて継承されるにちがいない。われわれは、そうした能力の磨き上げを介して、他の生物が成しえなかつた発達の自由を存分に享受してきた。もつともそれは、種としての先史の突然変異という発想に目を閉じて、あくまでも視野を、歴史的な体験世界に限ったことなのだが……。かなり固定化された人類の身体的な本性ですら、計画的な訓練を綿密に施したなら、いくぶんは改変され、もつと高次の能力

も手にできるだろうが、人間の心はしかし、これよりも無限に豊かな発展の可能性を秘めている。人間は、自分自身の力を自覚すればするほど、二つの世界——外なる世界と内なる世界——をさらに学んで、ひたすら自分のために、最善の生活を創り出そうとする。身体と心が一体化した人間存在に固有の本性は、自らの型の維持と継承を司る特定の条件を作り出し、肉体的かつ精神的な特定の形成行程を当人に課するのである。この行程は、全体として『教育』の名で呼ばれている。人間の手で実践される教育は、創造へと導く大いなる力によって生命を吹き込まれるが、この力は、あまねく自然の種に『種族の保存』を呼びかけるあの力といささかも異ならない。教育の場合はしかし、自覚された目標にひたすら至ろうと人間の知識と意志が計画的に努力する中で、それは、はるかに高い力にまで高められるのであるが……

こうした事実から、ある一般的帰結が導き出されてくる。まず第一に、教育は、単に個人にのみ属する実践ではない。それは、本質的に共同体の機能なのである。共同体の特性は、構成メンバーである個人を介して表明される。そして、人間というゾーン・ポリテイコン（共同体的存在）にとつて、共同体は、いかなる動物種にもはるかに勝って、あまねく振る舞いの母体であった。共同体には、その構成メンバーを育成する強い影響力が具わっているが、この影響力は、新しい世代の個人を、自らのイメージに沿って育成する計画的な企て——教育——において、最も永続的にはたらくだろう。社会の構造は、いささかの例外もなく、社会とそのメンバーを結び合わせる不文あるいは成文の法に固く支えられていたから、家族であれ、社会階級であれ、職業であれ、さらには民族や国家といったより広い複合体であれ、あまねく共同体の教育は、積極的に認知された『基準』の直接の表明にほかならない。

教育そのものは、共同体の生活とその成長に大きく歩調を合わせるか

ら、共同体への外からの変化や、さらには内からの変化——内部構造や知的発達のもの——によって、大きく改変されないわけにはいかない。教育はしかも、人間生活を支配する諸価値への一般的な自覚を土台としているから、その歴史も、共同体の内部で通用している諸価値の変化に深く左右される。こうした諸価値が不動であれば、教育の方もしっかりと基礎づけられているが、反面、それらが否定され崩壊すると、教育のプロセスもとたんに弱められ、ついには機能不全に陥ってしまう。このような事態は、伝統が、あるいは暴力的に覆されたり、はたまた内的に崩壊した際には常に生じるのである。もつとも、堅固で揺るがないなら、その教育は文句なく健全であるというわけでもない。教育の掲げる理想は、しばしば、文明の終焉を告げる老衰した保守の時代に、驚くばかりに堅固であったからである。たとえば、革命以前の儒教的中国、ギリシア・ローマ文明の末期、ユダヤ教の末期、さらには教会史、芸術史、学派史のある時代がそうであった。百年単位よりは千年単位で刻まれる古代エジプトの歴史など、ほとんど化石化した恐るべき堅固さを物語っているにちがいない。もつとも、ローマ人の間では、政治的・社会的な堅固さは最高の善とみなされ、対して革新は、ほとんど望まれも要求もされなかつたけれども・・・

ギリシアはしかし、これらとは別口のカテゴリに属していた。今日の観点に立つなら、ギリシア人は、オリエントの偉大な人びとを超えた根本的な前進を、すなわち、社会発展における新たな段階をしっかりと刻んでいる。かれらは、共同生活に向けた完全に新たな原理を樹ち立てたからである。かれらに先立つた国民たちの芸術的、宗教的、政治的な業績をどれだけ高く評価しようとも、本当の意味で「文化」と呼ばれるに足るもの——理想自体の計画的な追求——の歴史は、ギリシアを待つてはじめて開始されるにちがいない。

四

ここ最近の百年間に、現代の学問は、歴史の地平を途方もなく広げてきた。ギリシア人とローマ人に知られていた「人の住む」世界、すなわちオイクメネーは、二千年の長きにわたって世界全体と同じ拡がりをもつと信じられてきたが、今や、世界の中心に位置するごく狭い部分にまで縮小し、これまで探索されてこなかった文化領域が、新たに、われわれの視界に開示された。けれども、こうした文化的地平の拡大は、中心的な事実をいさかも改めなかつた。この点は今日、いっそう明らかであるだろう。すなわち、われわれの歴史は、特定国家のそれではなく、われわれが、物理的かつ精神的に帰属する国家グループのそれをイメージするなら、あくまでもギリシア人と共にはじまるのである。だからわたしは、われわれの国家グループを「ギリシア中心圏」と名付けたのだ。ところで、わたしは「はじめ」と口にしたけれども、これによって意味されているのは、単なる時間的な「はじめ」ばかりではない。さらに加えて、新たな発展段階にいたる時にはいつでも、われわれ自身を新たに方向づけるべく、そこへと決まって戻っていかなくてはならない精神的な源としての「アルケー（根元）」も意味されていた。歴史を通じて、いつの時代にも絶えずギリシアに戻っていかれるのは、このような理由による。とはいえギリシアに戻って、その影響をおのずと新たにするからと言って、何も、ギリシア人にみる時間を超えた知的な偉大さに圧倒され、かれらを絶対視するあまり、その手に、われわれの運命から独立した、不動かつ不可侵の、われわれ全般に対する大いなる権威まで授けるわけではない。むしろ逆に、われわれが絶えずギリシアに戻っていくのは、ギリシア人が、われわれの人生の必要——時代が異なれば、その中身も大いに異なっていた——をしつかりと満たしてくれたからである。もつとも、ギリシア中心圏に属する国々も、それぞれに、ギリシアとローマでもある点では自分たちと抜本的にかけ離れているな、と実

感してはいた。こうした違和感は、いくらかは血と情感に、いくらかは制度的構図と精神的なそれに、いくらかは置かれた歴史状況に基づいていたかもしれない。しかしながら、ここにいう違和感と、オリエントの民族に出会った際に覚える完全な疎遠感では、途方もない差があった。後者は、民族の上でも知性の上でも、われわれと基本的に異なっていて、それゆえ、現代の論者たちが為すように、西欧の国民を、ギリシア人やローマ人から切り離すにあたって、中国やインドやエジプトから切り離すのと同じ障壁でそうするのは、疑いもなく、歴史的視野における由々しき失態にちがいない。

ギリシアに抱くわれわれの親密感は、ただ単に民族に根ざすというわけでもない。人びとの本性を理解する上で、民族的な要素がいかに重要であったにせよ、である。われわれの歴史はギリシアと共にはじまる。と口にされる際には、この場合の「歴史」に含ませている意味をしっかりと確かめなくてはならない。歴史は、たとえば、その大半が知られていない未知の新世界の「探求」という意味を含むかもしれない。これは、ギリシアの「歴史の父」ヘロドトスが理解した方法であった。それに従うなら、われわれは今日、あらゆる形態の人間生活を余すところなく掴み取る鋭いセンスを具えているから、最も遠方の人びとにさえ、いつそう親密な関心を抱いて研究し、その心に入り込んでいくこともできる。けれども、このような半ば人類学的な意味での歴史は、生き活きた精神の親近性に根ざした歴史——一つの国家における、あるいは国家の小グループにおける——から厳しく区分されなくてはならない。ある民族ないし時代の内なる本性が本当に理解され、観察する側とされる側が創造的に触れ合えるのは、まさしく後者の歴史を描いてない。さらには、後者の歴史を通してのみ、われわれは、成熟した社会的・知的な様式や理想を共同して蓄えることもできるだろう。そうした様式や理想は、一

つの国家グループを構成している多くの異なった民族の間で、さまざまの変容や妨害、混淆や葛藤、消滅や再生に晒されずには済まないのだけれども……。そのような様式と理想の共同体は、ある意味ではギリシアとローマの間に存在したし、さらにはまた、西欧の偉大な現代国家の間にも——個々にも、また全体としても——存在した。もし仮に、こうしたより深い歴史の観念——起源と理想を共有する「ままとまり」という意味での——が受け容れられるなら、もはや世界全体を歴史探求の対象とみなすには及ばないだろう。われわれの地理学的地平がどれほど広がるうとも、われわれの歴史の境界は、過去三千年にわたってわれわれの歴史的運命を拘束してきた境界を越えて、さらに先に延ばされるには及ばないのである。将来の何らかの時点で、あらゆる民族が、ここに描かれたような精神的絆で一つにまとめられるか否かについては、答えることができない。こうした問いは、われわれの目下の研究にまったく関係しないのである。

ギリシア人が教育史の上でいかに革命的かつ画期的な位置を占めているかは、二、三の文章ではとうてい説明し切れない。この本の狙いは、ギリシア人の文化——つまりはパイデア——を解説し、それに固有の性格と歴史的な発展の軌跡を描き出すことにある。パイデアは、さまざまな抽象概念の総体などではなく、ギリシアの歴史それ自体であって、そこには、歴史の具体的実体があまねく含み込まれていた。けれども、そうしたギリシア史の事実ですら、ギリシア人の手で永遠の様式にまで造形されなかったなら、はるか以前に、さっぱりと忘れ去られてしまつたにちがいない。ここにいう「永遠の様式」こそ、変化と運命に抵抗するかれらの最高の意思の表明にはかならない。最も初期の発展段階では、かれらはいまだ、こうした意思に基づく行為がそもそも何を意味するかについて、はつきりした考えを抱いていなかった。けれども、歴史の道

をさらに歩んで、いつそう確かな視力を手に入れるにつれ、変わることはない人生の目標が、かれらの前にいつそう活き活きと提示されるようになった。その目標とは、他でもない、いつそう高次の人間を育て上げることであった。教育こそ、あまねく人間の努力の目ざすところを具体化してくれる——ギリシア人は、こう信じて疑わなかった。個人の生存も社会の生存も、つまりは教育によって最終的に支えられている、とかれらは考えた。ざっとこれが、自らの本性とその課題について、かれらが、その発展の頂点において解釈した中身であった。われわれは、心理学的な、あるいは歴史的な、あるいは社会的なすぐれた洞察を介して、ギリシア人をよりよく理解できるはずなどと想定するかもしれないが、これなど、まるで正当な根拠を欠いていて、アルカイック期のギリシアの雄大な作品ですら、パイディアという光に照らして、はじめて最もよく理解できるにちがいない。これらは、パイディアという同じ精神によって創り出されていたからである。ギリシア人は、ギリシア精神の達成した業績全体を、つまるところパイディア——「文化」——に託して、古代の他の国々に伝え残した。皇帝アウグストゥスは、ローマ帝国を築き上げるといふ壮大な課題を、ギリシアの「文化」に関わらせて構想したのだが、こうした文化の理想がなかったなら、ギリシア・ローマ文明も、ともあれ歴史的に一つにまとまらなかつたらうし、西洋世界の文化も、つまりは存在しなかつたにちがいない。

ごく普通に「文化」という言葉が用いられる際には、ギリシア中心圏にのみ共有された理想などでなく、はるかに通俗的かつ一般的に、世界にあまねく国民——最も原始的な国民ですら——に固有なものがイメージされがちである。われわれは、ある国民を特徴づける生活のあまねく表現様式の総体に、等しく文化という言葉を用いて憚らないから、この言葉は、単なる人類学的な観念へとひたすらに薄められ、もはや、価値

——自覚的に追求された「理想」——の観念であることを辞めてしまっていて、そうした曖昧な類比の意味では、中国文化、インド文化、バビロニア文化、ユダヤ文化、エジプト文化について語るのも、あるいは許されるかもしれない。もつとも、こうした国々はいずれも、本当の意味で「文化」に相当する言葉ないし理想を携えていなかったけれども……。高度に組織化された国ならば、むしろ、そのすべてが独自の教育体系を具えていたけれども、イスラエル人の立法や予言、中国人の儒教体系、インド人の仏法などは、その知的構造の全体を考えるなら、基本的かつ本質的に、ギリシア人のいう文化の理想からかけ離れていた。一連のギリシア以前の「文化」について語る世の習慣は、つまるところ、すべてを同じ用語に置き換えようとする実証主義者の情熱によって生み出されたといつてよい。これはしかし、ヨーロッパの伝統用語をヨーロッパ以外の事柄にも当てはめる一種の僭越にほかならない。歴史的な手法は、われわれの観念をそれとは縁のない世界に当てはめようとすると、とたんに偽りとなる、という事実を無視しているわけで、ほとんどすべての歴史的思考が陥りがちな循環論は、こうした基本の誤りに端を発していた。そのような循環論を完全に除き去るのは、われわれが、生来の思考様式を抜け出したい以上、まずもって不可能に近いのだが、しかし、歴史の基本的な問題なら何とか解消できないわけでもない。そうした解消の一つは、ギリシア以前の世界が、ギリシア人と共にはじまる世界——形成の原理として「文化」の理想が最初に確立された世界——と抜本的に異なる点をしっかりと理解することなのである。

文化の理想を生み出したのはギリシア人なのだ、といくら声を大にしても、おそらく、さほど大した称賛ともならないだろうし、多くの点で文化に倦み疲れた時代（『今日』）には、ギリシア人をこう語っても、むしろ貶しでしかないかもしれない。けれども、われわれが今日「文化」と

呼んでいるのは、本来のギリシア的理想の最終の変形でしかなく、衰弱し切った代物にほかならない。ギリシア風に語るなら、それは、およそパイデアに程遠く、秩序を欠いた生の巨大な外的装置（カタスケウエー・トゥー・ピウー）でしかない。実のところ、現在の文化は、本来のギリシア文化に何も付け加えることはできず、むしろ逆に、自らの真の意味と方向を確立するにあたり、ここから照らされ、さまざまに変形されなくてはならないように思われる。そして、そのような原型を具体化し、これに帰り着くとは、つまるところ、ギリシア人にきわめて近い精神態度を身に付けることにほかならない。ちなみに、こうした態度は、ゲーテの自然哲学に——おそらくは歴史的にギリシアから直接に相続されなかったにせよ——しっかりと再現されていた。歴史の時代も終わりに近づくと、思想や習慣が硬直化して固まり、精密な上にも精密な文明の機構は、人間の英雄的資質に反対してこれを抑圧するから、どうしても生命は、固い外皮の下で再び動き出さざるを得なくなる。まさにこの時、深く根を張った歴史本能がわれわれに働きかけて、われわれ自身の国民文化の宝庫（＝ギリシア）へと帰り着かせるとともに、さらには、ギリシア精神——今日のわれわれはその多くを共有している——がなおも熱烈に生きてはたらき、その燃えるような生命に訴えて、自らの熱情と特質を永遠化した様式の創出にひたすら励んでいたあの時代を改めて生きさせるのである。ギリシアは、今日の文明を映し出す単なる「鏡」をはるかに超えた、あるいは、われわれ合理主義者の自我意識の「象徴」をはるかに超えたものである。理想の創造それ自体は、あまねく誕生の秘密と驚異にしっかりと取り巻かれていて、人間精神のいつそう深い価値を理解できる人間なら、最高のものですら日々の行使で劣化する危険が高まる中で、ますますいつそう本来の様式に立ち戻っていかなくてはならない。すなわち、歴史的記憶と創造的天分の夜明けに、人間精神が最初

に具体化されたあの様式に向けて・・・

ギリシア人が教育者として世界史的に重要であるのは、すでに語られたように、かれらが、社会における個人の位置を新たに自覚したからであった。古代の東方世界に比べると、かれらは抜本的に異なっていて、ゆえにその理想も、むしろ現代ヨーロッパのそれと融合しているように見受けられる。こうした点に着目すると、ギリシアの理想は、現代の個人主義的な自由のそれであったと容易に結論できるかもしれない。そして事実、現代人の鋭い個人性の感覚と、ギリシア以前の東方世界の徹底した自己放棄ほどに極端な対比は、いずこにも存在しなかった。後者は、陰鬱な威厳を湛えたエジプトのピラミッドとか、東洋の国々の仰々しい王墓や記念碑などに如実に表明されているにちがいない。オリエントの世界では、一方に、あらゆる自然の釣り合いをはるかに超えた、たつた一人の「神なる王」の得意満面——われわれにはまるで縁のない形而上学的な人生観を表明している——があり、他方には、巨大な群れをなした人びとへの厳しい抑圧——専制君主のあの半宗教的な得意満面の結果である——があるのだが、これに比べると、ギリシア史の始まりは、まさしく個人の価値という新たな観念の始まりであったように思われる。こうした新たな観念は、キリスト教の手でわけても広められた「個々人の魂は、それ自体が無限の価値をもった目的そのものである」という信仰とも、さらには、ルネッサンスで——あるいはその後——宣言された「すべての個々人は、まさしく自律的存在である」といった理想とも、かなり容易に同等視されてきた。というのも、もしもギリシア人が人格の価値を認識しなかったら、個々人の文句のない価値への訴えも、そうたやすくは正当化されなかったろうからである。

ギリシア人は、自らの哲学的発展の絶頂において、社会の中で個人が占める位置という問題を定式化し、これをひたすら解き明かそうと試み

たのだから、ヨーロッパにおける人格の歴史は、まさしく、かれらと共に始まるにちがいない。この点は、歴史的に是認されてしかるべきだろう。ローマ文明とキリスト教も、この問題にはいくばくかの貢献をし、ギリシア、ローマ、キリスト教という三者の影響が混ぜ合わされて、ついに、今日の個々人に具わる完全な自我の感覚も生み出された。けれども、こうした現代的観点から出発したのでは、文化の歴史に占めるギリシア思想の位置など、とうてい明確かつ基本的に理解できないはずである。この問題に迫るには、ギリシア精神の特性そのものに目を向けた方が、はるかに上策なのだから・・・

目を見張るような多様性、自発性、多才さ、そして自由な個性——これらは、ギリシア人が驚くほど多方面で驚くほど急速に発展できた必要条件であったように思われ、最初期から最後期までのあまねくギリシアの著作家たちの内に驚くばかりに確認されるけれども、それはしかし、現代的な意味での慎重に磨き上げられた主観性などでは更々なかつた。それらは、生まれつきの自然的素質であつた。これらを具えたギリシア人は、ついには自らの固有性を自覚したのだが、それはしかし、直接にでなく間接の道を介してであつた。かれらは、客観的な基準や法則を発見し、そうした基準や法則はただちに、かれらの思考や行為に新たな確かさを刻印したからである。オリエントの立場からは、ギリシアの芸術家たちが、何らの束縛もない自由な動作やポーズを示す人間の肉体を再現するために、どのような工夫を凝らしたかなど、とうてい理解できないにちがいない。かれらは、たまたま選ばれた一連の部位をひたすら模倣するという外的なプロセスよりは、むしろ肉体の構造、そのバランス、その動きを支配する普遍的な法則をしっかりと学んで、その再現に動しんだからである。ギリシア精神にわけても目に付くさりげない軽やかさも、やはり同じく、この世界は、理解可能な不変の法則によって支

配されているという——以前の国民たちには隠されていた——事実をしっかりと捉えるところから生まれた。かれらは、自然本来のもの（ピュシス）を嗅ぎ分ける生来の感覚を具えていた。かれらの手ではじめて解き明かされた「自然（ピュシス）」という概念は、明らかに、かれらに固有の精神が生み出した貴重な所産にほかならない。これが考え付かれるはるか以前から、かれらは、この世界を確かな眼差しで眺めていた。そこに映し出されたのは、世界のいかなる部分も他の部分から切り離されず、常に、大いなる生きた全体の一部であつて、そうした一部はしかも、自らの位置と意味をこの全体から導き出しているという光景であつた。これは一般に「有機的見解」と呼ばれている。個々の事柄は、ここでは、大いなる全体の一部とみられていたからである。生存そのものが、まことに自然で、成熟した、生まれつきの、有機的な構造を具えているというこの感覚は、現実世界を支配する法則を発見して、これを定式化しようとするギリシア人の本能とも密接に結びついていた。この本能は、かれらの思考、その会話、その行為、その芸術のすべてに、つまりはギリシア生活のあまねく領域にその顔を覗かせているのである。

ギリシアでは、芸術作品を創り上げて鑑賞する際にわけても美的本能が重視されたものの、この本能はしかし、ある観念を芸術的創造の場に慎重に移し替えるよりは、あくまでも「観る」という単純行為を自らの中核としていた。ギリシア人の手で芸術が理念化され、知的な姿勢が美的な物理行為に混ぜ合わされたのは、歴史も比較的のちの、前五世紀と前四世紀の古典時代に入ってからのもので、ギリシア人の美的感覚そのものは、ごく自然の無意識的なものであつた。この点をいくら繰り返しても、だからといって、造形美術に当てはまる事柄が、なぜ、同じく文学にも当てはまるかを説明したことにはならない。文学では、そもそも技術のポイントが、観るということでなく、むしろ言語と情動の相互

作用に基づいていたからである。われわれはしかし、ギリシア彫刻や建築に見るのと同じ「形の原理」を、ギリシア文学でも目にするのではないだろうか。よく口にされる言葉に、詩や散文の造形的——あるいは建築的——性格があるけれども、これなどは実に、彫刻や建築を真似た構造的価値でなく、言語とその構造における同類の基準を言い表わしている。そのような隠喩が用いられたのは、あくまでも、彫刻や建築をイメージした方がいつそう鮮明に——それゆえいつそう素早く——構造原理が把握されるだろうからにほかならない。ギリシア人の文学の様式には、種類の多彩さと構造の精密さがたつぷりと具わっていたのだが、そうした様式はすべて、言語を用いて自らを表明する純朴な様式が、理念的な色彩の濃い技術と文体に移行していく中でおのずと出来上がっていた。雄弁術でもやはり、複雑なプランを練って、多くの部分から有機的な全体を創り上げる能力そのものは、純粹かつ素朴に、われわれの感性と思考と会話を支配している法則をおのずと感知する力——ますます鋭敏化する——に自らの出発点を仰いでいた。こうした感知力は、いつそう抽象化と技術化の度合いを深めて、ついには、論理学、文法学、さらには雄弁術を生み出したのだった。この点において、われわれは、ギリシア人から多くを学ぶことができたし、学ばれたのはまさに、文学、思想、文体を今なお支配している不動かつ不変の様式の数々であった。

このことは、ギリシア精神の最も奇跡的な所産であり、この精神に固有の構造を最も雄弁に物語っている「哲学」にも当てはまるにちがいない。哲学においては、ギリシアの芸術と思想の様式を作り出した力そのものが、最もありありと表明されていた。その力とは、実に、自然界と人間生活を多彩に染め上げるあまねく出来事と変化の底に横たわる永遠の法則を明確に感知する力にほかならない。さまざまな法典類なら、どの国の人びともそれなりに生み出したけれども、ギリシア人はしかし、

万物に行き渡った大いなる法則を常に求めて、自らの生活と思想をこれに調和させようとした。かれらは、この世界を哲学したのである。ギリシア哲学の真骨頂ともいべきテオリア（「思索」は、ギリシアの芸術や詩ときわめて深くかつ本質的に結びついていた。というのもそれは、まず第一に思い浮かぶ「合理的思考」ばかりでなく、あらゆる対象を一つの全体として捉え、万物の中にアイデア（という可視的なパターン）を見る「超越的洞察」——テオリア（「観照」という名が本来的に意味する——も含んでいたからである。われわれは、より後の段階からより前の段階を解釈して一般化する危険性を十分に承知しているのだが、それでもしかし、プラトンのアイデア——大いにユニークでわけてもギリシア的な知性の産物——は、その他の多くの点で、ギリシア精神の何であるかを理解する有力な手掛かりになると考えないわけにはいかない。とりわけ、ギリシアの彫刻と絵画を貫いてその顔を覗かせている「形を与えよう」という傾向など、まさに、プラトンのアイデアと同じ源から湧き出している。双方の関係は、古代においても注目されていて、しばしば、それ以後も観察されてきたのだが、同じことはギリシアの雄弁術にも、そして実際、ギリシア人の基本的な知的姿勢のいたる所に当てはまるにちがいない。たとえば、初期の自然哲学者たちは、この宇宙を、ただ一つの法則に支配された大いなる全体として眺めようと努めたから、計算と実験を中心とした今日の経験主義的な科学者たちと全くの対極に位置していた。かれらは、一連のバラバラの結果を寄せ集め、これらを体系化して抽象的な帰結を導き出すという帰納的な方向はとらずに、はるか先に進んで、個々の事実に位置と意味を与える普遍概念に基づいて、あくまでも演繹的に、これらを大いなる全体の一部と解釈したのであった。この傾向はさらに、ギリシアの音楽や数学を、それ以前の国々——今日に知られている限りの——のそれらから大きく区分した、あの普遍的なパ

ターンへも導いたのである。

ギリシア精神は、教育の歴史に特有な位置を占めているが、これは実に、次の二点に基づいていた。すなわちその一つは、先にも述べた固有の特性、要するに、あらゆる部分を大いなる理念的全体に関連づけてこれに従わせるといふ至上の本能で、ギリシア人は、こうした見解を押し広げて、単に芸術ばかりでなくその人生にも反映させていた。さらに今一つは、普遍を捉える哲学的な感性、要するに、人間本性の最深の法則と、個々人の精神生活と社会の構造を支配している——この法則に基づいた——基準の数々を感知する卓抜のセンスであった。それというのも普遍——つまりはロゴス——は、ヘラクレイトスが精神の本性を鋭く洞察して了解したように、あたかも法律が国家の全市民に共有されるのと同じく、あまねく精神に共有されていたからにはかならない。教育と取り組むにあたり、ギリシア人がひたすら依拠したのは、その手にしつかりと把握されていた二つのもの、すなわち、人間生活を支配している外なる自然原理と、それを用いて人間が、自らの肉体的な力と精神的なそれを鍛え上げる内なる法則であった。こうした内および外の法則についての知を、教育における形成力として用いること、しかも、それを介して生きた人間を、あたかも陶工がせっせと粘土をこね、彫刻家が黙々と石を刻むように、前もって構想された「目ざす形」に向けて創り上げること——これは、まことに大胆な創造的発想であつて、芸術家と哲学者の才を具えたこの国民（「ギリシア人」）であればこそ、はじめて展開できにちがいない。かれら自身が創り上げなくてはならない最大の芸術作品は、まさしく「人間」であつた。教育とは、理想に合わせてその性格を慎重に形造つていく人間的営みにほかならない——このように把握したのは、かれらが最初であつた。「その手も、その足も、その心も、いささかの傷もなく真四角に造られている」——これは、マラトンの陸戦と

サラミスの海戦の時代を生きたギリシアの詩人が、まことに入手しがたい真の徳の何であるかを記述した言葉である。このような教育こそ、本當の意味での「文化」の名にふさわしく、プラトンもこれに、人格を「形造る」といふ物理的隠喩を用いていた。ドイツ語の「ビルドゥング（陶冶）」は、ギリシア的でプラトンの意味における教育の本質をはつきりと明示しているにちがいない。ここには、芸術家の造形行為に加えて、構想されている導きのパターン——アイデアないしテュポス——まで見事に含み込まれていたからである。歴史を通して、こうした観念はくり返しその顔を覗かせてきたが、その際にはいつでも、ギリシア人から受け継がれた中身がしつかりと添えられていた。しかもこれは、若者たちをあたかも動物のように調教して、特定の義務を強制的に履行させるといふ発想が捨てられ、教育の真の本質が改めて思い出される際にはくり返し登場したのだつた。ギリシア人は、教育の仕事がまことに偉大でまことに困難だと実感しながらも、それでもしかし、比較を絶した強い衝動でこれに引き寄せられたのだが、これには特別の理由があつた。もつともそれは、かれらの美的な視力にも、その「テオリア的」な精神性にも基づかなかつた。かれらを一瞥して分かるのは、かれらの思索の中心には「人間」が位置している、という点にちがいない。ギリシアの神々、その彫刻と絵画、その哲学、その詩、最後にその国家——これらはすべて、ただ一つの大きいなる光の分岐にほかならない。というのも、神々はまことに人間臭かつたし、彫刻は——絵画でさえ——人間ならではの姿を描き出すことにひたすら集中し、哲学は、論理の道筋をたどつて宇宙の問題から人間の問題に移行して、ついには、ソクラテス、プラトン、アリストテレスの手でその絶頂に達したし、詩もまた、ホメロスに始まつて後のすべての世紀にわたり、尽きることのないそのテーマは、あくまでも人間であり、その運命であり、その神々であつたし、国家もやはり、

人間とその生活を形造る力として捉えないなら、とうてい理解できなかったからである。それらはすべて、人生に対する人間中心の姿勢の表明にほかならず、この姿勢はしかも、これ以外の何ものによっても説明されず、これ以外の何ものからも導き出されない。この基本姿勢は、ギリシア人によって感じられ、造られ、考えられたすべてに及んでいた。他の国民はそれぞれに、神々や王や精霊なら創り上げもしたけれども、ほかでもない。人間を創り上げたのは、ひとりギリシア人のみであった。

われわれは今や、ギリシア精神の何であるかを、オリエント世界と対比しながら定義できるのではないだろうか。ギリシア人は、まさしく人間を発見したけれども、それはしかし、主体的な自己を発見したのではなく、人間本性に宿る普遍法則を把握したのだった。捉えられた知的原理は、世にいう個人主義ではなく「ヒューマニズム」であった。この場合のヒューマニズムは、しかしながら、元々の古典的な意味で用いられていて、いうならば、人間ならではの特性を尊重する立場ともなるだろうか。そうしたヒューマニズムは、ラテン語のフマニタスに由来し、このフマニタスは、少なくともワロやキケロの時代以降、人間臭い行動という——ここでは不適切な——初期の野卑な意味に加えて、いつそう高貴でいつそう厳密な意味も具えていた。すなわちヒューマニズムは、人間を教育して自らの真の形相(イデア)——正銘の人間本性——にまで導き上げるプロセスそのものを意味したのである。これこそは、ギリシア人の考える真のイデアであって、ローマの政治家からも、しかるべき手本として大きく賛仰された。こうしたイデアの出発点は、現にある個人でなく、あるべき理想の個人であった。群衆の一員としての人間、そして、独立した人格としての人間のさらに上に、理想としての人間が聳え立っていて、三番目のこの人間こそ、ギリシアの詩人、芸術

家、哲学者に加えて、教育家たちも絶えず目を振り向けた導きの星にほかならない。ならば、理想の人間とはそもそも何なのか。それは、あらゆる個人がひたすらに模倣すべき普遍かつ妥当な人間性のモデルを措いてない。すでに指摘しておいたように、教育の本質は、社会共同体のイメージする人間の姿に合わせて個人を創り上げることにあった。ギリシア人もまた、そうした共同体のモデルに合わせて人間ならではの人格を形造ることから出発しつつ、しかしながら、このプロセスの意味をますます強く自覚するようになって、ついには、教育という問題にいつそう深く入り込んだ結果、その基本原理を、歴史上のいかなる時代といかなる国民にもまさる確かさと哲学的な深さでしつかりと把握したのだった。

人格という理想こそ、ギリシア人が、個人を教育して実現を目指した当のものにほかならないが、それは、具体的な時間と空間の外側にある空しい抽象的なパターンでなく、あくまでも生きた理想であって、どのつまりは、ギリシアの魂の中で成長し、民族の運命の変転につれて変化し、その歴史と知的発展の全段階を内にたつぷりと吸い込んでいた。しかるに、われわれに先立つ世代の古典学者やヒューマニストたちは、そうは理解しないで、あろうことか歴史を説明から除外して、ギリシア——あるいは古典古代——における「人間性」や「文化」や「精神」を、時間を超えた絶対的理想の表明であると解釈したのである。ギリシアの国民は、なるほど精神の領域において、まことに多くの不滅かつ不易の発見をのちの世代に伝え残したけれども、だからといって、理想という基準に合わせて個々の人格を創り上げるのがギリシア的な意思なのだと語られる際に、ここにいう基準が、常に固定された最終的なものとして思い描かれるなら、それは、わけても危険な誤解というほかはない。たとえば、ユークリッドの幾何学やアリストテレスの論理学は、今日で

すら、精神を働かせる上での永遠の原理群であつて、とうてい脇に棚上げするわけにはいかず、そうした知的法則は、あくまでも普遍かつ妥当で、あまなく時代的な中身を見事に洗い落とししているけれども、やはり、ギリシア科学の所産に間違ひはなく、歴史的な目で眺めるなら、まさしくギリシア的であつて、思考と観察におけるこれ以外の数学原理・論理原則の共存をいさかも排除しない。こうした事情は、ギリシア精神のその他の仕事で、それらを創り上げた時代や国家の特徴をなおも刻印し、特定の歴史状況と直接に結びついたものに対して、さらにいつそう当てはまるにちがいない。

ローマ帝国の初期に生きたギリシアの批評家たちこそ、ギリシアにおける偉大な時代の傑作の数々を、時間を超越しているという意味で「古典的」と記述した最初の人たちであつた。それらの傑作が「時間を超越していた」のは、いくぶんは、後統の芸術家たちの手で模倣されるべき公の手本であつたのと、いくぶんは、後代が従うべき倫理的な手本であつたからにほかならない。この時期には、ギリシアの歴史はすでに、世界規模を誇るローマ帝国の生活の一部となり、ギリシア人はもはや、独立した国民であることを終えていたので、なおも自らを導いている高次の理想を除けば、他に、自らの伝統を維持しかつ称えるものを持たなかつた。ゆえにかれらは、いかにも古典主義者らしい「精神の神学」——特有のヒューマニズムを合法的に記述した——を展開した最初の人たちであつて、かれらの営んだ美的な「ヴィタ・コンテンプラティヴァ（観想的生活）」は、現代のヒューマニストやアカデミックな学者が営むべき生活の原型となつた。双方の生活は、われわれの精神こそ、永遠の真理と美の領域であつて、特定の国民の多難な運命を高く超え出ている」という、まことに抽象的で超時間的な觀念に立脚していた。ゲーテの時代のドイツのヒューマニストたちも、やはり、本当の意味での人間本性が、ある

特定のそれこそ固有の歴史の一時期に、まさしく完全に現われ出たのがギリシア人にほかならない、と考へていたけれども、これなどはしかし、かれらの教義が実際に押し進めていた新たな歴史的見地から推して、むしろ「啓蒙の時代」の合理主義にいつそう近い態度であつたかもしれない。

歴史的探求の世紀は、古典主義が衰えると同時に榮えはじめ、今では、古典主義の見地からわれわれを引き離してもいるのだが、ただ、すべてを歴史的事実とみなすこの方法は、すべての猫がそこでは灰色になる暗夜に喩えられてよく、制約も目的もひたすらに取り払う一途な情念に貫かれていた。そこで、古典主義とは逆のこうした危険に立ち向かうべく、改めて今日、古典古代の永遠の価値に立ち戻るとしても、この価値をもちや、時間を超えて崇拜に値するもの（＝永遠の偶像）だなどと臆面もなく主張はできない。そうした価値は、それらが生み出された時代にそうあつたように、特定の歴史的環境内ではたらく力であつてこそ、秘められた基準性と抗いがたい威力を發揮して、われわれの生活を一変しかつ新たに創り上げたからである。ギリシア文学の歴史は、それが生み出され、それが語りかける当の社会から完全に切り離して——つまりはイン・バクオ（中空的）に——読むことも書くこともできない。ギリシア精神がこの上なく強靱であつたのは、それが、共同体の生活に深く根ざしていたからであつた。文学作品に登場する理想はすべて、それを生み出して美的な様式に転換した作者の手で、あの、個人を超えた強力な共同体生活から導き出された。偉大なギリシア人たちの作品に紹介された人間とは、ポリス（＝共同体）的人間にほかならない。ギリシアの教育は、完全に独立した人格を育て上げようとする一連の私的技術の総体などではない。そうした教育は、ヘレニズム時代が崩壊して——近代の教育はここに直接の源を發している——ギリシアの国家が完全に消滅する

まで存在したわけではなかったけれども、ドイツの古典学者のみは、当人たちが非政治的な時代に生きていたからであろうか、そう信じて疑わなかった。今日のわれわれなら、国家に知的な関心を抱いているから、ギリシアの最盛期にあつても、国家を欠いた精神など、精神を欠いた国家と同じくまるで成り立たない、という事実におのずと目を開いてはいないので……。ヘレニズム期の偉大な作品でさえ、こうした特有の国家センスの記念碑にほかならず、このセンスは、ホメロスの叙事詩に描かれた英雄時代からプラトンの教育国家——ここでは個人と社会が、哲学という土俵で最後の闘いを繰り広げていた——まで、延々とはたらく続けていた。将来のヒューマニズムは、ギリシア教育のすべてに当てるまる基本事実、すなわち、ギリシア人のいう人間性には、絶えず、人間存在の本質的特性ともいふべき「政治性」がしっかりと含み込まれていた、という事実の上に築かれなくてはならない。ギリシア人の中でも第一級の人たちは、常に、自らが社会の下僕であると実感していたが、これなど、生産的で芸術的・知的な個人生活と共同体がいかに密接に結びついてきたかを物語る何よりのしるしにちがいない。そのようなあり方は、東洋の世界でもよく知られていて、そこでの生活が、過酷な半宗教的規則で濃く彩られているような国家では、このあり方が、とりわけ自然であつたように思われる。けれども、ギリシアの偉大な人たちが民衆の前に進み出たのは、神の言葉を述べ伝えるためでなく、自分自身が知っていた事柄を広く民衆に教えて、自らの理想を具体化するためであつた。かれらは、時として宗教的靈感の形で語つたけれども、その場合ですら、そうした靈感は、個人的な知識と様式に置き換えられるのが常であつた。靈感そのものは、なるほど、その形と狙いの点で個人的であつたものの、かれら自身はこれを、あくまでも公的で社会的なものだと感じていた。詩人にして政治家にして賢者である（ポイエーターズ、ポリティコス、ソポ

ス）というギリシアに特有の三位一体は、国民にとつての最高の指導者像を映し出していった。このような精神的自由に含まれながら、しかも深い知識によつて——あたかも神の法によるかのように——社会への奉仕を義務付けられつつ、ギリシアの創造的な天才は、気高い教育の理想を考案しかつ具体化した。かれは、こうした理想を介して、今日の個人主義的文明の美的で知的な——とはいへ皮相な——輝きをはるかに超えることもできた。多くの人たちは、古典時代のギリシア文学を理解することにあたり、それを、純然たる美学のカテゴリに位置づけた結果、空しく不首尾をくり返すばかりはなかつたけれども、この文学は、そうしたカテゴリーに別れを告げてさらに上昇し、人間本性への限りない影響力を駆使しつつ、当の本性を何千年にも互つてしっかりと磨き上げてきた。それもしかし、こうした理想を欠いては到底できなかったにちがいない。ギリシア人の芸術は、わけても偉大な時代にわけても高貴な傑作がそうしたように、われわれに対する影響という点でわけても強いはたらくを示している。ギリシアの芸術史が是非とも必要とされるのは、ほかでもない、この芸術には、ギリシア生活をその時々支配していた具体的理想がありありと映し出されていると考えるからである。ギリシアの芸術は、前四世紀の末期まで、基本的には共同体の精神をしっかりと表明し、この点は、ギリシアの文学にも直接に当てはまるにちがいない。たとえば、ピンダロスの勝利の歌によつて喚起される競技者の理想など、われわれがもし、オリンピック競技に勝利した人たちの彫像を知らなかったら、どうして理解できえようか。そのような彫像は、この理想的肉体的な具体例であり、ひいては神々——人間存在に可能な肉体的・精神的な完全さとして、ギリシア人に実感された「すべて」を体現した——の像でもあつたからである。ドーリア式の神殿は、いうまでもなく、個々の部分を一つの全体に文句なく従わせるといふドーリア的性格とドーリ

ア的理想が、この世に残したわけでも強力な記念碑であった。この神殿は、今は消滅した往時の生活を永遠化したもので、しかも、当時の宗教的信仰から靈感を吹き込まれていたもので、そうした生活と信仰を歴史的に再現する巨大な力をなおも具えていた。とはいえ、パイデアを真に代表したのは、ギリシア人の考えるところに従うなら、このような無言の芸術家たち——彫刻家、画家、建築家——でなく、あくまでも詩人であり、音楽家であり、雄弁家——政治家をも意味する——であり、哲学者であった。詩人にいつそう近いのは、ある点で、造形美術家よりは立法家の方であった——こうギリシア人は感じていたのだが、それは、詩人にしても立法家にしても、教育的使命をもとに担っていたからにはかならない。ただし、彫刻家の称号を主張できたのは、ひとり立法家のみであった。生きた人間を存分に形造れたのは、かれを措いてなかったからである。ギリシア人はしばしば、教育行為を造形美術家の仕事になぞらえたけれども、かれらはしかし、ヴィンケルマンと違って、自らの芸術本性にもかかわらず、芸術作品の鑑賞が人間を教育するなどと考えなかった。かれらが考えたのは、言葉と響き、そして——言葉や響きやその双方が見事に処理された場合の——リズムとハーモニーこそ、本当の意味で魂を形造ることのできる唯一の力なのだ、ということだった。いかなるパイデアにも不可欠なのは、あくまでも前向きなエネルギーであって、これは、肉体的な強さと機敏さを鍛える諸々の競技（アゴーン）でも重要視されたが、精神の磨き上げでは、さらにいつそう重要視された。ギリシア的な観念に従うなら、芸術は、これとは異なったカテゴリーに属し、古典期の全体を通して、自らの誕生の基盤であった宗教の領域にその位置を占めていた。絵画とか彫刻は、基本的に、飾り（アガルマ）であった。この点はしかし、英雄の叙事詩には当てはまらず、教育のエネルギーは、そうした叙事詩から他のあまねく詩へと流れ出た。詩その

ものが宗教と緊密に結びついていた場合でさえ、その根は、社会的・政治的な生活に深く張つていて、この点は、詩よりはむしろ散文作品にいつそう当てはまるかもしれない。ギリシア文化の歴史は、その本質において、ギリシア文学の歴史とすっかり重なり合うのである。というのもギリシア文学は、それを生み出した元々の作者たちが意図したところに従うなら、ギリシアの理想が形造られていくプロセス自体を映し出しているから、ギリシアの理想が形造られていくプロセスを理解しようとするのであれば、実際に、詩を除いて助けとなる文学的証拠など何も持っていないから、事実という意味でのギリシア史を論じる場合に、本当に論じられてよい題材は、わずかに詩と芸術に描かれたプロセスのみとなるだろう。その時代のあまねく生活のうち、これ以外の何ものも生き残れなかったのは、まさに歴史の意思とみるほはなく、こうした世紀を通してギリシア人の文化を跡付けようとすれば、必然的に、かれらの手で形造られ磨き上げられてきた理想そのものを研究しないわけにはいかない。

こうした事実、一方で、この本の方法を規定し、他方で、その目的も規定するにちがいない。この本で論じられている主題がなぜ選ばれたか、各々の場合に採られた立場がなぜ採られたかについては、特別な説明などいささかも必要としない。個々の読者は、おそらく、しかじかの事柄が省かれていると落胆されるかもしれないが、そうした点も、全体として、それ自らが自らを説明していたからである。ここに新しい仕方でも提出されているのは、その実、まことに古い問題であった。というのも教育は、そもその始めから古代世界の研究と分かち難く結びついてきたからである。古代世界に続く時代は、古典古代をつねに、知識と文化に溢れた無尽の宝庫——はじめの頃は、まことに貴重な外的事実や芸術の蓄積体という意味で、のちには、模倣されてよい理想を満載した世界という意味において——とみなしてきたが、現代における古典研究の

興隆は、しかるに、古典古代をめぐる見方に抜本的な改変をもたらした。最近の歴史的考察は、特定の時代にそもそも何がどのように生じたかの確な割り出しに、主たる的を絞ってきたから、過去を明らかにしようとして情熱的に努める中で、歴史家たちはその足を滑らせ、今では、古典古代も単なる歴史の一片——わけても興味深い一片ではあったが——としかみなくなり、今日の世界への直接の影響などにほとんど関心を払わなくなつた。そのような影響をしっかりと実感するか、あるいはまるで実感しないかは、単なる個人的感性の問題と化して、そうした影響の価値をどう査定するかも、ひたすら個人の好みに委ねられてしまった。古代史に向けたこの種の事實的・網羅的な研究は、もつと偉大なパイオニアの手に委ねられても、当人が信じている程に冷静でも客観的でもなかつたろうが、さらに一般化するにつれ、ある種の「古典文化」が実際に存在したと認める者の数も——そうした文化が揺るぎない自らの位置を強く主張していたにもかかわらず——ますます減つていった。かつて古典文化を支えていた古典主義的な歴史観念は、今日的探求のおかげで完全に粉碎され、古典的な研究もまた、自らの理想を新たな基盤の上に築き直す努力をいささかも払わなかつたのだが、われわれの文明全体が強烈な歴史体験に揺さぶられて、自らの価値を改めて吟味し始めている今の重大時に、それは、古代世界の教育的価値を改めて査定し直さないわけにはいかない。それこそ、この研究が担うべき最終の課題であり、それいかに答えるかに、この研究の存続もつまりは掛かつていた。そして、この課題に応えうるのは、むしろ、歴史的事実に基礎を置いた歴史科学のほかはない。古典的な研究のなすべき義務は、かくして、ギリシア人にへつらつて、かれらを理想的に描き出すことではなく、かれら自身の知的な本性を研究して、朽ちることのないその教育的業績と、後代のあまねく文化運動に及ぼした直接の刺激の正体をしっかりと解釈すること

なのである。

貴族階級とアレテー（徳）

いわゆる教育は、まことに自然で普遍的な社会機能であつたから、多くの世代は、これを受け容れて伝え残すにあたり、あえて問い質すことも、改めて論じることもほとんどなく、文献の形で最初に言及されたのは、比較的のちのことであつた。言及された中身そのものは、大雑把にいうと、あらゆる国民の間で変化はなく、つまるところ、道徳的なものと実践的なものに集約された。それらは、いくぶんは「神々を崇めよ」「お前の父母を称えよ」「客人を敬うべし」などの命令から、またいくぶんは、古来の実際的な知恵のルールや外的な道徳法規から、さらにいくぶんは、ギリシア人が「テクネー」と名付けた専門技術や伝統——世代から世代へと伝達できたので——から構成されていた。神々や両親や客人を敬う上での初歩的なルールは、のちに、いくつかのギリシア国家で成文法となつたけれども、そうした条文では、なおいまだ法律と道徳の間に抜本的な区分は設けられていなかった。これに対して、まことに豊かな民衆的知恵の流れは、多くの古い行為規則や格言を旧来の迷信から取り出しながら、ヘシオドスの格言詩（『仕事と日々』）という形ではじめて世に出たのだつた。けれども、専門的な技術や手芸の類いは、当然ながら、自らの秘伝を書き記して世に出すことに激しく抵抗した。この点では、ヒポクラテス学徒が実施した医師の職業的誓いからも十分に読み取れるにちがいない。

このような意味での若者の訓練は、しかしながら、一般的な教養教育からしっかりと区分されなくてはならない。後者では、人間のあるべき理想の達成が目指されていたからである。そのように理想が強調される

と、有用性の方は無視されるか、あるいは、少なくとも後方に退かないわけにはいかず、そうした場で発言権を持つのは「カロン（美しさ）」を措いてなく、これが文句のない理想となるだろう。掲げてしかるべきは有用性の方か、はたまた美の方か——こうした二つの教育観の対質は、歴史のいたる所で目にされるが、それは双方が、人間本性の基幹部分に座を占めていたからにほかならない。双方を記述するあたり、どうした言葉を選ぼうともさほど問題はないけれども、一般にはおそらく、前者には「教育」という言葉が、さらに後者には「教養」という言葉が用いられている。教養と教育は、明らかに、異なった起源を背負っていて、一方の教養は、外的な容貌や行為に加えて、内的な本性にまで及んだから、まさしく人間全体に互るものであった。いわゆる外なる人間も、さらには内なる人間もともに、意識的な選抜と訓練のプロセスをへて慎重に造り上げられていったから、そのプロセスは、プラトンの手で、良犬の育て上げに準えられてもいるのだが、これ自体は、そもその出発において、国家の中でも少人数の階級——貴族——にしか割り当てられない。古典ギリシアにおける「カロスカガトス（美にして善なる人士＝高貴な人物）」は、英国におけるジェントルマン（紳士）と同じく、いうまでもなく、その起源を貴族階級に仰いでいた。前者にしても後者にしても、そうした称号とともに、騎士的貴族という理想にまで遡るだろうが、これらは、新興勢力である中産階級に引き継がれ、それに伴って、双方を鼓舞していた理想もおのずと一般化し、ついには、その感化力を国民全体にまで押し広げたのだった。

社会そのものが階層分化したから、あらゆる高次の文化も生まれた——これは、文化の歴史における基本の事実である。そうした階層分化は、人間相互の肉體能力と精神能力が、生まれつきの差を孕んでいたから生じたのだが、それはしかし、特権階級を生み出して、これを固定化

させていった。けれども、ここに働いていた遺伝原理は、いうまでもなく、下層階級から新たに強い血を補給されて、何とかその釣り合いを保っていたし、支配の座にある階級は、何らかの暴力的変革によって、たとえ権利のすべてを剥奪されようと、あるいは打ち滅ばされようと、これに替わって直ちに新たな指導者たちが、ほぼ例外なく当の貴族階級を新たに構成した。貴族こそは、国民の文化を形造る上での第一の発起人にほかならない。ギリシアの国民性は、ひとえにギリシア文化の歴史を介して形造られてきたが、その歴史は実のところ、初期ギリシアの貴族世界において、人間固有の完全性という決定的な理想が生み出された時点から始まった。ギリシア民族のエリートは、ひたすら、この理想に向けて訓練されたのである。われわれの手にする最初期の文献資料は、貴族の文化が、一般大衆のレベルをはるかに超えていた点を告げ、しかも、それ以後の文化は、どれほど高い知的レベルに達していようと、その中身がどれほど大々的に改変されていようと、すべからず、貴族文化に端を発していたという痕跡をなおも留めていたから、われわれの歴史的追求も、こうした貴族文化の描き出しから着手されなくてはならない。文化とは、端的にいうなら、当該国家における貴族的理想——ますます知性化の度合いを深めた——を措いてない。

ギリシア文化の起源を探る手掛かりとして「パイディア」という言葉の歴史を用いるのは、まことに当然と映るかもしれないが、さにあらず、この言葉は、前五世紀以前にはまるで目にされなかったのである。目にされなかったからといって、もちろん無かったわけではなく、おそらくは単に、発信の未確認に因るのかもしれない。すなわち、新たな文献資料が発見されたなら、この言葉が、さらに以前に登場していたのも十分に証拠づけられるだろうが、そうした場合ですら、われわれの知恵がいつそう増すというわけではない。パイディア自体の初期の用例は、この

言葉が、前五世紀の始めには、いまだ「子を育てる」という狭い意味しか持たず、のちの高次の意味など実際にはまるで持つていなかったのを、ひたすら報告するのみだからである。われわれとしては、ギリシア文化の歴史を探るいつそう自然な手掛かりを、むしろ「アレテー」という理想の歴史に見い出さなくてはならない。この理想は、最も初期にまで遡ったからだが、そうしたアレテーにピタリと当てはまる言葉を見つけるとなると、今日の英語中にはまるで見当たらない。アレテーの最も古い意味を探っていくと、誇り高く優雅な道徳心と戦士の猛々しい武勇のしつかりした組み合わせに行き当たったからである。それはともかく、アレテーという理想こそは、初期ギリシアの貴族教育の真骨頂にほかならない。

初期ギリシアの貴族世界がいかにあつたかを最初に記述したのは、まさしくホメロスであつたが、ここにいう「ホメロス」は、『イリアス』と『オデュッセイア』という二つの偉大な叙事詩の「代表的著者」という風に解してもらいたい。そうしたホメロスに目にされるのは、当時の生活の實際を物語る歴史的証拠と、そこでの理想を永遠化した詩的叙述にほかならないから、かれ自身は、二つの観点から研究されてしかるべきだろう。すなわち、まず第一に、貴族世界の中身をしっかりとイメージするため、そして第二に、この世界における理想——ホメロスに登場する英雄たちが体現していた——を十分に吟味するために、である。貴族世界の理想は、二つの叙事詩に登場する偉人たちを介して、当初のごく狭い有効範囲をはるかに超えた文化的意義をたつぷりと獲得していたのである。文化の歴史を辿ろうとすれば、実のところ、栄枯盛衰をくり返す歴史の進展にわれわれの関心を振り向けるとともに、同じく、あまねく創造的な時代をこの上なく表明した「理想」を不減化するために繰り返す歴史の進展にわれわれの関心を振り向けないわけにはいか

ない。

アレテーという言葉は、その他の箇所と同じくホメロスにおいても、しばしば広い意味で用いられ、人間的な長所に加えて、神々の絶大な力とか良馬の気質や走力など、おしなべて人間ならざる事柄の優秀性をも表明していた。しかるに、凡庸な一般人には、いかなるアレテーも具わっていない。そして、貴族階級の子息がふさわしからぬ奴隷根性を身に付けた際には、ゼウスは決まって、当人のアレテーを半分ばかり奪い去り、ゆえに当人は、かつてと同じ人間ではもはやありえなかつた。アレテーこそ、貴族階級に固有の属性と考えられてよい。世の指導者が執つて立つべき当然の基盤は、衆に抜きん出た強さと武勇であつて、いやしくも指導者であらんとすれば、何はともあれアレテーを欠いては始まらない——ギリシア人は、常にこう信じていた。アレテーという言葉は、この上ない能力や無比の卓越性を意味する「アリストス（最上のもの）」とこの源を同じくして、このアリストスは、複数形で用いられる際には、決まって「貴族（アリストイ）」を表示した。ギリシア人は、人間をランク付けるにあたり、すべからず当人の能力に依拠したから、しかも、人間の能力は、果たすべき仕事に応じて各種各様であつて、おのずと、異なつた基準で評価されてよかつたから、そうした基準を、広く世間一般にも用いてまるで憚らず、ゆえにかれらは、アレテーという言葉で、人間ならざる事柄や存在にも堂々と当てはめて、この言葉の本身は、のちの時代にいつそう豊かなものとなつた。そのアレテーも、ほんの少しなら、ホメロスの後の巻で、道徳的——ないし精神的——な資質に用いられていたけれども、これ以外では、それが意味するのは——初期ギリシアの風潮に合致して——あくまでも戦士や競技者の力量や技量、なかななくその英雄的な武勇であつた。そのような武勇はしかし、常に、肉体的な力と密接に結びついてきたから、今日的な意味では、とうてい道徳

的な資質とはみなしがたいであろう。

『イリアス』と『オデュッセイア』という二つの叙事詩が世に登場したころ、アレテーという言葉は、街中で交わされる生きた会話中でも、ホメロスの狭い意味しか持たなかったのだろうか。もちろん、そうしたわけではなく、これらの叙事詩にしても、一般的なアレテー以外の基準をそれなりに承知していた。たとえば『オデュッセイア』で一貫して褒めそやされているのは、知的な能力——わけでも英雄たちの——であって、当人の勇敢さなど、通常、その抜け目のなさやずる賢さに比べると低い評価しか受けていなかった。勇敢さや強さとは別種の特性の数々も、ホメロスの時代、アレテーの観念中に含み込まれてしかるべきであり、こうした意味の拡張は、『オデュッセイア』における少数例を別にしても、初期の詩の各所に目にされたから、アレテーという言葉は、おそらく、日々の会話を介して新たな意味を手に入れ、その意味が次いで、詩の用語にも盛り込まれたものと思われる。これに対して、英雄的な強さと勇敢さをわけても強調したもう一方のアレテーは、この時まで、英雄叙事詩の伝統用語にしっかりと根を下ろして、以後、その意味を末永く留めることになった。戦争に明け暮れた大いなる民族移動の時代、人間の評価は、当然ながら、もっぱら戦闘での武勇に基づいてなされたはずで、そうした事情は、他の国々でも大差はあるまい。そのような中で、形容詞の「アガトス」——名詞の「アレテー」とその源を異にしつつ意味の上で似通った——は、精神の気高さと戦場での勇氣をともに合体させた意味を含むようになった。すなわちアガトスは、時として「高貴な」を、時として「勇敢な」あるいは「有能な」を意味したのだが、ただし、のちに見られるような「善い」だけは意味しないで、この点は、アレテーが「道徳的な徳」を意味しなかったのとよく似ているかもしれない。ここにみる古い意味は、その後も長く生き残って、「当人は勇敢な

英雄にふさわしく死んだ」などの慣用語や、しばしば、墓碑銘や戦いの記念碑にもその跡を留めることになった。

「アガトス」や「アレテー」の軍事面での意味は、このように、ホメロスでも優位を占めたけれども、双方の言葉はしかし、より一般的な倫理の意味もおのずと具えていた。そうした倫理の意味と軍事的意味は、実のところ、同じ源から導き出されていて、双方とも、並の一般人には該当しない基準の数々——戦時中と私生活の両方にわたる——を携えた。第一級の人士の証しにほかならない。およそこう考えると、貴族階級の規定は、ギリシア教育に二重の影響を及ぼしたのではないだろうか。まず第一に、ポリスはこの規定から、自らの倫理体系を形作る最もすぐれた要素の一つである。勇敢であるべき義務を受け継いだ。この勇敢は、ポリスでは雄々しさと呼ばれて、勇敢自体が男性のアレテーと等置されていたホメロスの伝統をありと思い出させてくれるにちがいない。さらに第二に、ポリスのいつそう高次の社会規範の数々は、まさしく貴族階級の実践から導き出されていた。そのような社会規範は、中産市民階級が奉じる道徳の特定訓戒によりはむしろ、日常行為における鷹揚さとか気宇壮大など、一般的な貴族理想にこそ求められたからである。

ホメロスにおいては、高貴な人間であるか否かは、当の本人が、義務の意識を具えているか否かで判定された。高貴な人間なら、厳しい基準に則って判定され、当人もまた、そうされるのを身の誇りとしていた。かれは、従うに足る永遠の理想を提示し、これを介して他の人びとを教育したのだが、当の本人は、何に対して義務の意識を抱いていたのだろうか。その対象は、ほかでもない「アイドス（廉恥）」であって、世の誰もが、これに向けて訴えてしかるべきだろうが、その際、もしもこれが軽視されると、そこに「ネメシス（義憤）」という血縁感情が喚起される

ことになった。アイドスとネメシス——それこそ、ホメロスの貴族階級が掲げた理想の基本柱にほかならない。高貴な人間は、誇り高い経歴や伝統的な実績を大いに自慢したが、その場合にも、しっかりと意識に留めて離さないことがあった。ほかでもない、自らの卓越も、これを導き出した当の徳を欠くなら脆くも崩れ去ってしまう、という点である。貴族たちは、そのギリシア名である「アリストイ（最も優れた人たち）」も示す通り、並の一般大衆からはつきりと区分された。アリストイと一口に言っても、さまざまなタイプが目につかぶだろうが、当の本人たちはそれでも、お互い同士で、常にアレテーを競い合っていた。男性の徳を具えているか否かは、実のところ、戦場での勝利を介してこそ検証される——ギリシアの貴族たちは、こう信じて疑わなかったけれども、それは、ここにいる勝利が、単に敵を肉体的に制圧した証しというよりは、入手困難なアレテーをしつかりと掌握している証しと解釈されたからであった。そのような発想を何よりも言い表しているのは、「アリストイア（武勲）」という言葉にちがいない。この言葉はのちに、叙事詩の英雄たち（アリストイ）が挑む単独の冒険に用いられたからである。英雄の生涯とその努力はすべて、最上位を目指しての妥協のない競争に彩られていて、いうならば、並み居る同僚たちを凌駕して先頭を切ろうとする絶えざる闘い、と形容されてよいだろう（こうしたアリストイアの数々を詩に描くのは、それゆえ、尽きることのない喜びでもあった）。戦士たちは、平時においても戦争競技を催して互いのアレテーを競い合い、そうした具体例は、『イリアス』にも目にされるにちがいない。そこには、パトロクロスの葬送儀式という形で、戦闘の小休止にさえ競技に打ち興じる戦士たちの姿が描き出されていたからである。ここにみられるライバル意識の激しさは、何世紀にも互って、「常に他者以上に優れていて、より有名であり続けるべし」という戦士貴族の標語であり続けた（そうした標語は、いつの

時代にも生徒たちに向けて引用されてきたが、今や、近代の教育界の「平等主義者」の手で、はじめて捨て去られたのだ。上に引用した一節には、当時の貴族階級の教育観が、余すところなく凝縮されていて、ゆえにグラウコスに、苛烈な戦場でディオメデスに遭遇し、われこそは相手にふさわしい好敵手だと証明するべく、まず最初（ホメロスの流儀に則って）、自らの輝かしい祖先たちの名を列挙し、次いでこう続けたのだ。「ヒッポロコスが、わたしの生みの親であり、わたしは、その息子であると宣言する。かれは、わたしをトロイに送るにあたり、何度も耳打ちして、絶えず最高のアレテーを目標に掲げて、同僚のすべてを凌駕するように」と論してくれた」と。これこそ、英雄同士の争いがいかにあったかを髣髴させる見事なエピソードであって、『イリアス』第一巻の著者もよく知っていたから、かれは、あえてペレウスにも、息子のアキレウスに向けて同じ助言を吐かせたのだった。

『イリアス』はしかし、初期ギリシアの貴族階級が奉じていた高次の教育理想について、これとは別口の中身も漏らしていた。それに従うと、戦闘における武勇といったアレテーの古い意味に、もはや、新時代の詩人たちは十分に満足できなかつたのが分かるだろう。かれらの手で新たに奉じられた人間的な完全さのイメージは、たとえば、当人の行為の気高さが内面の気品を直接に映し出した結果であるような人物であった。このような新しい発想は、重要なことに、あのポイニクス——ギリシアにおける「英雄の中の英雄」であるアキレウスの年老いた助言者でありその師でもあった——の口から表明されていて、この点には、わけても注意をふり向けてもらいたい。戦闘中の危機に際して、かれが、愛弟子の心に思い起こさせたのは、それに則って当人が教育された理想そのもの、すなわち、「言葉のすぐれた語り手で、同時に、行為のすぐれた為し手でもあるように」であった。この詩句は、のちのギリシア人の間で、

人間が秘める可能性を余すところなく開花させよう、と求めるギリシアの教育理想をはじめて公式化したものと信じられていたが、まさにその通りで、これ自体は、レトリックと知的洗練に溢れたのちの時代に、言葉に溢れつつ行為を欠いた当世を、あふれる行為に彩られた今は昔の英雄世界で補うべく、ひんばんに引用されもした。にもかかわらずこれ自体は、違った風にも解釈できるかもしれない。そこには、貴族階級の精神世界が余すところなく漏らされていたからである。すなわち、言葉の自由な使いこなしは、知的な卓越の何よりの証しである——これが、これらの強く信じる場所であった。アキレウスが、怒りにむつつりして、ギリシア軍の頭領たちの差し向けた使者の面々に応対していた時、ポインクスは、上の詩句を当の本人に囁きかけた。ここで詩人は、アキレウスと対比するべく、使者の面々として、能弁この上ないオデュッセウスと、その逆の、一切の無駄口を叩かない行為一辺倒のアイアコスが登場させているが、これを通して訴えられているのは、ほかでもない、最高の理想とすべきは円熟した——つまりは極端でない——人間性である、という点であった。そうした理想は、アキレウスという「英雄の中の英雄」に見事に個人化されていて、かれこそは、第三の使者であるポインクスの手で、この理想に向けて教育された当の本人にほかならない。アレテーという言葉は、このように、元々は戦場での武勇をもつばらに意味していたのが、のちになると、ここでの文章からも明らかのように、そもそもの気高さの観念を變形して、その時代のいつそう高次の理想をも含み込ませて憚らなかつたから、言葉の方も、そうした理想の発展にふさわしく、いつそう広い意味を獲得したのであった。

アレテーに本質的に伴ったのは、世にいう「誉れ」である。この誉れは、初期の社会では、長所や能力と切っても切れない関係にあって、ゆえにアリストテレスも、まことに適切にこう記していた。誉れこそ、ア

レテーに至ろうとする半ば自覚的な努力が、その進捗状況を計測するに足る、ごく自然な尺度であった、と。かれの告げるところに耳を傾けてみよう。「人びとは、自らの価値——つまりは自らのアレテー——を自らの手で確かめるべく、ひたすらに誉れを追い求めているように見受けられる。かれらは、自分たちの内実に精通している思慮深い人物から、そのアレテーを讃えてもらおうと努めるのだ。こうしてアレテーは、かれらの目に、明らかに「卓越性」の姿で映っていたことになる……」。これに対して、のちの時代の哲学は、あくまでも逆に「内なる基準に従うべし」とくり返し訴えて、誉れについても、自らの内なる価値が——同胞たちの評価という形で——外に投影された結果にほかならない、という風に解釈すべきだと教えたけれども、ホメロスの世界の住民はしかし、自らの価値をひたすら、所属する社会の基準に則って判定した。かれは、あくまでも属する階級の所産であって、アレテーも、他者の目に自らがどう映っているかに基づいて、つまりは測られたのだった。のちの時代の哲学的人間なら、そうした外的認知を捨象して何らの痛痒も覚えなかつたろうが、それでもしかし、(アリストテレスの語るように) 外的認知から完全に無関心ではいられなかつたにちがいない。

ホメロスの時代の貴族階級は、人間のこうむる悲劇の中で、得られて当然の誉れが拒まれる事態に勝るものはない、と固く信じていた。英雄たちは、敬意を絶やすことなく互いを遇し合ったが、それは、こうした敬意の上に社会組織の全体が築き上げられていたからである。かれらはすべからず、ひたすら誉れに飢え、その飢えは、個々の英雄の道德的資質ともいえたから、偉大な英雄や力に溢れた王子なら、おのずと、いつそうの誉れを求めて止まなかつた。ホメロスの世界の住民は、輝く偉業を成し遂げたとき、それに見合う報い——つまりは誉れ——を要求していささかも譲らず、その場合に心を占めていたのは、主として、払われ

た奉仕に見合う「支払い」などではなかった。誉れを導き出すのは、あくまでも称賛（エイノス）であり、屈辱を導き出すのは、その逆の非難（プソゴス）であった。このような称賛とか非難は、のちの哲学道徳では、社会基準を直接に反映しているという意味で、社会生活の大きな支えとみなされもしたが、それにしても、ギリシア人の良心は、どれほど「公的」な色彩を帯びていたことか——これを思い描くのは、今日では、かなり困難にちがいない（実のところ、初期のギリシア人たちは、今日の主流である個人的良心など思い浮かべたこともなかった）。この事實は、かれらの意味した誉れの中身を捉えるに先立って、しっかりと了解されていなくてはならない。さて、キリスト教的感覚の持ち主なら、誉れを求める心——いわゆる自己栄達心——を、われわれの罪深い虚栄心が現われ出たものと考えられるかもしれないが、ギリシア人たちは、この種の野心こそ、個人を超えた理想郷——そこでのみ個々人は真の価値を手に入れる——への尊い渴仰にほかならない、と信じて疑わず、その意味では、英雄のアレテーは、当の本人が斃れるまで終了しない、と述べられてもあながち間違いとはいえないだろう。アレテーは、限りある生命しか持たない人間にこそ在って、それゆえ、死すべき人間を措いてアレテーはなかったのだが、そのアレテーは、死すべき人間以上の生命をもつて、当人の榮譽の中に脈々と生き続けた。ひとえに人間のみならず、神々もやはり、自らにふさわしい誉れはしっかりと要求して、これが阻害されたなら、まことに執拗に仕返しを図り、逆に、崇拜者たちがその行為をしかるべく褒め称えようと、心から誇らしく思われた。ホメロスの世界の神々は、いうならば、永遠の生命を具えた貴族たちにほかならない。ギリシア的な崇拜や敬虔の要諦は、あくまでも神々を褒め称えることにあって、敬虔であるとは、要するに「神々を称えること」に異ならない。神々をも人々をも、そのアレテーに依拠してしかるべく讃えるのは、持つて生ま

れた本能なのかもしれない。

こうした土台に立って、はじめて『イリアス』にみられるアキレウスの悲劇的葛藤も正しく理解されるにちがいない。かれは、同胞たちに激しく怒り、助けの要請も断固として拒んだが、そうした振る舞いはしかし、大げさな個人的野心から導き出されたのではない。ギリシアの心情に従うなら、偉大な野心こそ、偉大な英雄に特有の資質にほかならず、そのような英雄の手にして当然の誉れが損なわれた時、トロイに向けたアカイア勢の結束の基盤そのものが、大きく揺らぐことになった。他者の誉れを侵した人間は、つまるところ、本当のアレテーも見失わざるをえない。このような難局は、今日なら、あるいは愛国心に訴えて鎮められるかもしれないが、そのような愛国心は、古えの貴族世界ではほとんど馴染みがなく、ゆえにアガメムノンは、手にした至上の権力に訴えてひたすら横柄に振る舞う以外になかったけれども、このような振る舞いも、貴族的な心情には、先の愛国心に劣らず馴染みがなかった。その心情に従うなら、指揮官は、あくまでも「同胞の中の第一人者（プリムス・インテル・パレス）」でしかなかったからで、アキレウスは、手にするはずの誉れが拒まれた時、そのような自分を、理不尽な暴君に向き合った貴族だと実感した。この点はしかし、さほど重要な事柄でもなく、かれを憤らせた何よりの原因は、この上ないアレテーが、それに相応しい誉れを拒まれたことであつた。「損なわれた誉れ」の第二の大きな悲劇は、アキレウスに次いで力のあつたギリシアの英雄アイアコスの死にちがいない。戦場に斃れたアキレウスの武器は、普通ならアイアコスが貰い受けるべきであつたのに、あろうことか、オデュッセウスの手に渡されたのだった。アイアコスの悲劇は、当人が、狂気に駆られて死ぬことで終わった。アキレウスの怒りは、このように、ギリシア軍を奈落の淵に導いたけれども、誉れとは、ひとたび損なわれると、果たして贖いが不可

能なかどうか——この点について、ホメロスは口をつぐんでほとんど語らない。ポイニクスはアキレウスに助言して、あまりに弓を引きすぎではなりません、苦難に喘ぐ同胞たちのためにも、ここはひとつ、アガ멤ノンの贈り物を「贖い」^{レウシ}として受け取るべきです、と囁きかけているが、アキレウスはしかし、元々の冒険談が伝えるところでは、贖いとしての捧げ物を断固としてはねつけた。とはいえこれは、当人が頑なであつたからばかりではなく、その点は、アイアコスのよく似た実例からも、くり返し確かめられるにちがいない。当のアイアコスは、かつての宿敵オデュッセウスと地下の冥界で再会し、思いやりに溢れた言葉を貰いながらも応答せず、押し黙つたまま、「他の魂たちの方に向き直つて、ほの暗い死者たちの王国へと」立ち去つたからである。アキレウスの母テティスは、大神ゼウスに嘆願して、こう訴えた、「わたしの息子を讃えてください。あの子は、他の誰よりも先に死ななくてはならないのに、アガ멤ノンは、そんな息子からしかるべき誉れを奪いました。オリュンポスの大神、どうかわが子を讃えたまえ！」と。すると、神々の中の最高神は、アキレウスに恵みを垂れ給いて、その結果、この英雄の助けを仰げないアカイア軍は、惨めに打ち負かされることになつた。このようにしてアカイア軍は、自分たちの最大の英雄からその誉れを騙し取ることで、どれほどの不正を働いたかをまざまざと思ひ知つたのだつた。

もつと後になると、ギリシア人たちは、そのような名誉心を人間的長所とは考えなくなつて、この感情は、われわれも理解するように、いわゆる野心に該当するものとなつた。もつとも、民主制の時代に入つても、この感情は、個々人と国家の絡み合いに照らして、それなりに正当とみなされる場合もないわけではなく、名誉心の道徳的な高貴さの側面は、アリストテレスの描く「メガロプシユコス（誇りに溢れた高潔な人間）」を考察すると、最もよく理解されるにちがいない。プラトンとアリストテ

レスの道徳論は、多くの細目にわたつて、初期ギリシアの貴族道徳を基本の下敷きにしていて、ゆえに、かれらの見解として世に知られているものが、どうした起源をもち、どうした発展をとげて、どのように伝達されてきたかを歴史的に考察しようとすれば、おのずと、こうした観点に立たないわけにはいかない。古えの理想は、階級的な色彩を濃く纏つていたものの、哲学の手で純化され普遍化されて、徐々に、そうした色彩を拭い去つたが、逆に、そこに認められた永遠の真理や不滅の理想は、同じプロセスをへて、いつそう強化されいつそう確かなものとなつた。前四世紀の思想が、ホメロス時代のそれに比べて、はるかに詳細かつ精緻であつたのは断るまでもなく、そうした発想を——あるいはこれに正確に相当するものすら——ホメロスに期待してもとうてい叶わないのだが、それでもアリストテレスは、あらゆる時代のギリシア人たちと同じく、多くの点で、ホメロスに登場する英雄たちに目を注ぎ、かれらの行動様式に則つて自らの理想を展開した。そのゆえにかれは、初期のギリシア思想を理解する上で、われわれの次元を遙かに超えることもできたのである。

誇り——ないし高潔さ——が一つの徳とみなされているのを目にして、われわれは、最初は怪訝に思うかもしれない。さらには、そうした誇りをアリストテレスは、他の徳のように、いわゆる「独立した徳」とは信じないで、他の徳を前提として成り立つ「いうならば他の徳を飾るもの」と考えているが、これもまた注目に値するのではないだろうか。ここでの意味を正しく捉えようとすれば、アリストテレスが、ここで何を試みていたかを正しく理解しなくてはならないが、かれは、道徳意識を分析して、古えの貴族道徳における高潔さのアレテーに正しい位置を割り当てようとしていたのだつた。いささか別の文脈で、アリストテレスはこう呟いている、わたし自身は、アキレウスとアイアコスこそ、こ

の資質（高潔さ）の理念的典型であると考えているのだ、と。双方の实例に照らすと、高潔さは、そのままでは道徳的に無価値であつて、完全なアレテーに支えられないなら、むしろ愚かしくさえあるだろう。ちなみに、ここにいう「完全なアレテー」は、あらゆる卓越性を最高にまとめ上げたもので、アリストテレスやプラトンの口から、堂々と「カロカガティア（美にして善）」と称された当のものにはかならない。偉大なアテナイの思想家たちは、アレテーといえども、高潔な人間を対象としなければ、とうてい真の完成に至りえないと考えていたから、とどのつまり、自らの哲学の源は貴族階級にあると証言していたに等しい。アリストテレスにしてもホメロスにしても、讃えるに足るアレテーによつて当の高潔さを意味づけていて、ゆえに、精神的・道徳的な人格をこの上なく見事に表明したのが「高潔さ」なのだ、という自らの所信をしっかりと正当化できた。「それというのも誉れは、アレテーが受け取つてしかるべき賞与であり、能力ある人間に手渡されて当然の贈答品であつたのだから」。このようなわけで、誇りこそアレテーの増進剤と称されてよいが、その反面、こうも主張されているのを忘れてはならない。真の誇り——あるいは真の鷹揚さ——に向けた営みは、あまねく人間的課題の中で最高の難事に属している、と。

ここにおいて、初期の貴族道徳が、ギリシア的人格を創り上げる過程でいかに力強い役割を果たしたかが、しっかりと把握されるにちがいない。そして、ギリシアにおける人間観やアレテー観が、ギリシア史の全体を通じていかに途切れずに発展してきたかも、ただちに照らし出されるのである。そのような人間観やアレテー観は、なるほど、時代を経るにつれて変形し、中身もいつそう豊かになつたものの、それでもやはり、貴族の道徳規定という当時の形態をしっかりと保持していた。ギリシアの文化理想には貴族的性格が強く刻印されている、と絶えず口にされる

のは、実に、こうしたアレテー観に起因していたのである。

ここで少し、アリストテレスに導かれて、アレテー観のさらなる内包のいくばくかを考察してみよう。かれはこう説明している。完全なアレテーを希求する人間の努力は、「ピラウティア」という高尚な自己愛にその源を仰いでいるのだ、と。こうした教説は、抽象的な思索が導き出した単なる気まぐれではない——もしもそうなら、自己愛を初期のアレテー観に対応させるなど、とんでもない誤解にちがいない。アリストテレスが試みているのは、あくまでも自己愛の弁護であつて、それは、次のように訴えられている。いわゆる自己愛は、当時の啓蒙的で「利他的な」風潮の主流的見解とは対極に位置しながら、それでいて十分な正当性を具えているのだ、と。これによつて、ギリシアにおける倫理思想の基盤の一つが明らかとなつた。アリストテレスは、高潔さや名誉心を褒めるのと同じく、この自己愛を讃えているが、それも実に、かれの哲学が、古えの貴族的な道徳規定に深く根ざしていたからにはかならない。というのも、自己愛における「自己」は、そもそもどう解されるべきなのか。われわれとしては、これを、肉体的自己の形で捉えるのではなく、われわれ自身を鼓舞して止まない理想として、すなわち、高貴な人間ならすべからず自らの全生涯を賭けて至ろうと努める当の理想として把握しなくてはならない。このように把握すると、われわれ人間が最高のアレテーにまで導かれるのは、ひとえに最高の自己愛を介してである——原語では、そうした自己愛を介して人間は「美なるものを掌中に収める」——点が、はつきりと見えてくるのではないだろうか。もつとも、ここに引用した「美なるものを掌中に収める」というセリフは、完全にギリシア的な言い回しで、ほとんど現代語に訳せない。美しさは、ギリシア人には高貴さも意味したからで、「美なるものを掌中に収める」——つまりは、その所有権をしっかりと主張する——とは、最高のアレテーとい

う豪華な賞を勝ち取るチャンスをはたすら逃さないことなのである。

アリストテレスはしかし、ここにいう「美なるもの」で果たして何を意味していたのだろうか。われわれなら、ただちに、のちの時代の洗練された中身——たとえば、十八世紀のヒューマニズムにおける「個人の崇拜」といった美的・精神的な自己発展を鼓舞するもの——を思い浮かべるかもしれないが、アリストテレスの説明は、まことに明快であった。わたしが念頭に置いているのは、主として道徳的ヒロイズムに属する行為なのだ——かれは、こう述べていたからである。自分自身を愛する人間なら、つねに、友人や祖国のために自らを犠牲にするのも、さらには、「美なるものを掌中に収める」ために財産や名誉を捨て去るのも、共にためらわないだろう——このようにかれは考えた。あまり耳慣れない「美なるものを掌中に収める」というセリフは、ここでもやはり繰り返されているのだが、われわれは今や、理想に向けた自己犠牲の極を、アリストテレスがなぜ、高次の自己愛の証しであると考えたかを理解できるのではないだろうか。「というのも、このような人間であつてこそ、静かであり快よりは、たとえ短くとも激しい快の方を好むだろうし、長年に互つて凡庸な生活を送るよりは、たとえ一年にせよ気高く生きる方を選ぶだろうし、さらには、小規模な行為を数多く繰り返すよりは、たとえ一つにせよ偉大で高貴な行為の方を心がけるだろうから」——かれは、こう口にしていたからである。

このような章句は、ギリシアの人生観の芯に何があるか、をはつきりと告げ知らせている。それは、いわゆるヒロイズム感覚にほかならず、この感覚のゆえに、ここでの章句にもとりわけ深い親近感を覚えたのだが、ギリシア史の全体は、これを糸口としてはつきり理解されるのではないだろうか。それは実に、短くはあつたが燦然と輝くギリシア精神の「武勳（アリストテア）」を、あくまでも心理学的に説明したものであつて、

ギリシア的なアレテーの根本動機は、「美なるものを掌中に収める」という先のセリフに見事に納められていた。ホメロスに登場する貴族の勇氣は、狂気じみた死の軽視に大きく勝つていたのだが、それも、そうした貴族が、高次の目標——美なるもの——の要求するところに肉体的自己を従わせたからにはかならない。その限りにおいて、美なるものを勝ち取るべく自らの生命も捧げて厭わない人間なら、おそらく、ひたすらに自己を主張して止まない天与の本能は、つまるところ、自己犠牲において最も燦然と輝くのだ、と気付いていたにちがいない。プラトンの『饗宴』を彩るディオティマの演説では、精神的な記念碑の構築に向けて立法家のくり広げる闘いと、詩人のくり広げるそれがいかに似通っているか、そしてまた、古代世界の偉大な英雄たちが、不滅の名声を勝ち取るべく、いかに進んで自らのすべてを投げ打つて、困難にも争いにも死にもしつかりと耐え抜いたか、が活き活きと語られていた。このような努力の汗はともに、この演説では、死すべき人間を駆り立てて、自らの永続化をひたすら希求させる強力な本能の何よりの実例であると説明されていて、そうした本能は、人間の野心が導き出すパロドックスの各々を成り立たせる形而上学的基盤である、と描かれているのである。アリストテレス自身は、友であつたヘルミ阿斯——アタルネウス王の息子——の不滅のアレテーを讃えて、見事な賛歌を献じていた。この人物は、自らの哲学的・道徳的な理想に殉じて雄々しく斃れたからである。アリストテレスは、当の賛歌の中で自らの哲学的なアレテー観を、ホメロスにみられるそれに、そしてまた、これに該当したホメロス世界の典型であるアキレウスとアイアコスにはつきりと結びつけていて、かれの手で描かれた自己愛の多くの特徴も、明らかに、アキレウスの性格から引き出されていた。ホメロスの詩と偉大なアテナイの哲学者たちは、アレテーという古いギリシア理想の途絶えない生命を介して、互いに、しつかり

と結び合わされていたのである。

訳者あとがき

ここに紹介する和訳は、W・Jaeger, PAIDEIA — Die Formung des Griechischen Menschen の英訳として有名な G・Highet, PAIDEIA — the ideals of Greek culture —, Oxford, 1939 をテキストにしている。イエーガーを和訳する際に、独文特有の圧縮性と抽象性に本気で手こずっていたわたしは、この英訳の意識性と具体性にどれほど助けられたか分からない。ハイエットの英訳は、いわゆる訳本の域を超えて、それ自体が、見事に完結した一個の読み物であった。

大学における外書講読のテキストに、たまたまこれを選んだ経緯もあって、教室での講読に合わせて、あえて和訳をパソコンに入れてみたのだが、改めて読み返してみると、独文の原典訳とは違ったストーリーの滑らかさが目に付いて、比較の意味でも、思い切って『紀要』に投稿することにした。

同じ中身ながら、著者が変われば、こうも全体が、様変わり、するものだろうか。訳文自体が原典を超えることは、まず見られないものの、双方がしかし、限りなく接近する事態ならあながち皆無ともいえないだろう。そうした数少ない例外の一つが、ハイエットの英訳にちがいない。今回は、紙数の制約もあって、「著者ことわり」「序文」「序論——教育の歴史に占めるギリシア人の位置——」「貴族階級とアレテー(徳)」のみを掲載することにした。

(本学非常勤講師)